例会抄録

山脇東洋の『外台秘要方』版行について

町　泉寿郎

本発表は、江戸中期、延享年間、京都の医官山脇東洋によって行われた『外台秘要方』の翻刻に関して、その具体的な状況とその背景について考察するものである。

〈『外台秘要方』版行関係年表〉

延享2・2・　望月三英から底本借覧の内諾
　　6・1『外台』翻刻の幕許
　　6・2宋本『外台』との校合開始
　　7・26底本京都到着
　　8・　校刻成功を北野天満宮に祈願。家塾に出版所を設く
延享3・5・　山県周南に自序の斧正を請う
　　8・28周南より添削と返書
　　9・10野呂元丈西上、途次望月序・野呂序を山脇に齎らす
　　10・　校刻終了
　　11・　将軍交替の拝謁に東下
　　12・29江戸城本丸に『外台』献上
延享4・1・6西丸に『外台』献上
　　1・13本丸において褒美下賜
　　1・15西丸において褒美下賜
この頃　太宰春台、服部南郭に見ゆ
　　2・　帰洛
夏～秋　周南に『外台』序文を要請
　　7・18『外台』清国舶載幕許
　　10・　周南序文成稿
　　12・1『外台』を北野天満宮に献ず

右記の年表によって版行事業の概略を示したこととする。次に翻刻の背景として次の点を指摘する。

①〈山脇東洋における『外台秘要方』の意義〉

『周礼』に医業の根拠を求め、張仲景の方を聖人の遺法として尊重し、『外台』に対しては選述の雑駁さを認識しつつも、私見を混じえぬ古文献引用の豊富さのゆえに評価する。

②〈徂徠学の影響〉

金元医学に疑問を抱き、古方に開眼するのが東洋三十歳の頃。荻生徂徠の著書に共鳴したのが四十歳ちかい頃。自分の抱く尚古的な医学史観に、徂徠の儒学史観・古代中国文化史観が一致することに驚喜し、以後医書にとどまらぬ古文献への興味拡大。テキストの文献学的配慮と聖人の制作に対する絶対視という歴史哲学を学び取る。

③〈徂徠派の人々との交流〉

周南門人増野雲門との交流を通して徂徠学を知る。また東洋門人帳に周南門人の名が散見する。周南は文章の添削者、

春台・南郭への東洋の紹介者、『外台』序文の撰文者の役割を果たした。詩文愛好の趣味と具体的な文学制作理論を古文辞学は提供した。

④〈舶載書の需要と供給の不均衡〉

『外台』中国刊本は、山脇翻刻以前には元禄十二年舶載の一部が知られるのみで、これは幕府の紅葉山文庫収蔵に充てられたと考えられ、一般の需要に応ずるものは絶無であった。

⑤〈底本提供者望月三英について〉

三英は将軍吉宗の厚遇により紅葉山文庫の古医書を自由に利用でき、寛保三年六月からは舶載書を原価で購入する許可を得ており、底本もかくして入手した。また古医書翻刻によって医学に功を残したいという熱意が強く、稀書を秘匿するようなことはなかった。

⑥〈野呂元丈の関与〉

元丈は東洋養父芸叟に学んだため東洋には弟子筋にあたり、三英とは享保期よりの親交があった。元丈の仲介なくして翻刻事業はあり得なかった。元丈に著書『外台秘要再校答問』が知られており、校合の実務は元丈が担当したかと考えられる。また翻刻本の中国輸出を提案したのも元丈であった。元丈の企画力、行動力は寄与するところ大であった。

⑦〈清水敬長の『金匱玉函経』翻刻〉

同年に東洋の実弟敬長によって翻刻された『金匱玉函経』は、『外台』引用の異文「傷寒論」ともども、漢代の張仲景方書の原型を研究するために不可欠の文献であり、二書は同じ意図の下、同じ人々の手で翻刻作業が進められたのであろうと考えられる。

⑧〈中国輸出とその後の評価〉

『外台』翻刻・輸出は、享保期の山井崑崙による『七経孟子考文』の成功に刺激をうけたものとみることができよう。しかし『七経孟子考文補遺』や『古文孝経孔安国伝』が清朝考証学者に影響を与え、叢書に収められたのに対し、山脇の『外台』にはそのような評価を聞かない（尤も明治期に版木が輸出され印刷されたが）。翻刻本の輸出後、寛延三年に三部、宝暦四年に一部『外台』が中国より舶載されており、日本における『外台』の稀少と需要を知ってのことと考えられる。これは中国で明版『外台』が必ずしも稀覯本でなかったことを示している。その上、山脇刻本は校合した宋本が残欠本であり、校合も充分ではなかったので、考証学最盛の乾隆期の中国において高い評価は得られなかった。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）

（平成九年三月例会）